

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06080

研究課題名(和文) 高齢がんサバイバーの存在意義を高める看護支援モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing support model to raise the significance of existence of older cancer survivor

研究代表者

菊地 沙織 (Kikuchi, Saori)

群馬大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：10758254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)： 高齢がんサバイバーが自己の役割をどうとらえているかを明らかにするために、因子探索型研究を行った。12名の対象者から得たデータを質的帰納的に分析し、高齢がんサバイバーは、がん罹患しても実施可能な範囲で役割を保持しようとしていることが明らかになった。

さらに、学術論文の中で「高齢がんサバイバーの存在意義」の使われ方をみるために文献検索を行った。検索語は“old age”“cancer”“existence value/importance of existence/meaning of existence”である。和文献19件、英語文献23件が該当し、これらの文献を用いて概念分析を行っている。

研究成果の概要(英文)： We conducted a factor search type study to determine how an elderly cancer survivor caught a role of the self. Qualitative by the data which obtained from 12 subjects; analyzed it inductively, and it was found to be going to maintain a role even if the elderly cancer survivor had a cancer as far as was possible. Furthermore, in a treatise of "the significance of existence of the elderly cancer survivor" performed document retrieval to be used, and to look at. The search word is "old age" "cancer" "existence value/importance of existence/meaning of existence". 19 sum literature, English literature 23 correspond and perform a general idea essay using these literature.

研究分野：看護学

キーワード：高齢者 がんサバイバー 役割

1. 研究開始当初の背景

日本は、世界における高齢化率が群を抜いて高く、どの国も経験したことのない社会を迎える。2013年10月に総務省が発表した人口推計¹⁾によれば、総人口に占める65歳以上の人口は25%を超え、4人に1人が高齢者となった。「団塊の世代」と呼ばれる、第1次ベビーブーム時(1947年~1949年)に出生した世代が2025年には後期高齢者になり、今後さらに高齢者が増加していく。

また、がんは罹患者が増加し、2人に1人ががんに罹患し、3人に1人ががんで亡くなっており、国をあげての対策が求められる。がん罹患率は男女ともに50歳代から増加し、高齢になるほど高くなっている²⁾。つまり、看護職が医療施設、あるいは在宅において、がんに罹患している高齢者を看護の対象とする機会がさらに増加していくことが予想される。

発達心理学者 E.H.エリクソンは、老年期の発達課題³⁾として、「統合性」を挙げ、人生の総まとめとして大切な時期であることを述べている。この「統合性」を行う時期にがんに罹患するということは、健康の喪失や、入院・治療による今までのライフスタイルの喪失、さらに家庭内や地域で担ってきた役割を喪失する可能性があり、大きな心理・社会的苦痛を受ける。藤田⁴⁾は、老年期の喪失体験に関して、「健康の喪失」「経済の喪失」「役割の喪失」が起こることを指摘している。中でも「役割」は、個人の自己概念・存在意義に関わっていることが研究者ら⁵⁾が行った研究で明らかになった。つまり、老年期でのがん罹患は、甚大な喪失体験をもたらし、役割の喪失、社会からの疎外感、個人の存在意義をも揺るがす可能性がある。西澤ら⁶⁾は化学療法を長期継続できている高齢がん患者の支えとなる要因を研究し、その中で「社会的存在価値」が重要であることを明らかにしている。つまり、治療継続や地域の中で自分らしく生きるためにも、自己の存在意義を実感することが重要である。

研究者は、難治性がん患者の配偶者の役割遂行に伴う認識の変化のプロセスを明らかにした。そこで、がんに罹っていたとしても、患者本人が重要視していた役割を遂行できることが患者らしさを保てることにつながり、それを支える援助が必要であることが示唆された。

以上のことから、看護者は、今後さらに増加するであろう高齢がん患者が、自身の役割を保ちながら生きる活力を持ち、自己の存在意義を実感しながら生活できるよう支援することが求められると考える。科学的根拠に基づいた看護支援モデルを開発することは、日本のみならず世界に新たな知見をもたらすと考え、本研究の着想に至った。

1) 総務省統計局ホームページより
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2013np/in>

dex.htm 2015/5/9 閲覧

2) がん情報サービスホームページ「最新がん統計」
<http://ganjoho.jp/public/statistics/pub/statistics01.html> 2015/5/9 閲覧

3) E.H. エリクソン, J.M. エリクソン, 朝長正徳, 朝長梨枝子 共訳. 老年期 生き生きしたかわりあい. みすず書房. 1990: 57-77

4) 藤田綾子. 老年期のパーソナリティと適応. セミナー介護福祉 老人・障害者の心理. ミネルヴァ書房. 1995: 39-53

5) 病気を抱える患者・支援者の役割遂行に関する研究の動向と課題. 菊地沙織, 藤本桂子, 神田清子ほか. 群馬保健学紀要. 2014; 34: 53-62

6) 化学療法が長期継続できている老年期悪性リンパ腫患者の支えに関する研究. 西澤千晶, 川原安代, 川淵加恵ほか. 国立高知病院医学雑誌. 2010; 18: 95-99

2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢がんサバイバーが、人生の統合を行う老年期において、自己の存在意義を実感しながら生活できるよう支援するための看護支援モデルを開発することである。

3. 研究の方法

本研究では、老年期にあるがん患者の存在意義としての役割保持のための看護支援モデルを開発するための因子探索研究、概念分析を実施する。その流れを以下に示す。

Stage 1: 高齢がんサバイバーに面接調査を行い、自己の存在意義、役割をどのようにとらえているか、がん罹患をどのように意味づけているのかを明らかにする。

Stage 2: 文献検討を行い、高齢がんサバイバーの存在意義の概念分析を行い、看護支援に必要な要素を抽出する

Stage 3: 人生の統合期において、自己の存在意義を高める看護支援モデルを開発する

Stage

1) 研究対象

A 病院に入院中で、以下の条件を満たし、研究の同意が得られた者

65歳以上のがん患者(がんの種類は問わない)

言語的コミュニケーションが可能

Performance Status (PS)が0から2

2) データ収集方法

半構成的面接で、がんに罹ったことをどのようにとらえているか、自身が担っている役割はあるか、その中で重要視している役割は何か等インタビューする
診療録から、対象者の基本属性についての情報を収集

3) データ収集までの手続き

研究実施施設の責任者に口頭および文書で研究の主旨の説明を行い、協力を依頼した。

協力の同意が得られたあと、研究実施施設病棟の看護管理者に選定条件を満たしている対象者の紹介を依頼した。研究対象候補者に対し、看護管理者より研究の概要を説明していただき、同意が得られた場合、改めて研究者から説明を行った。同意が得られた場合、看護管理者に報告の上、面接日程を決定し、実施した。

4) 倫理的配慮

倫理的規範に基づき、研究を行った。面接調査に伴う時間的拘束が生じる可能性があるため、対象者の診療・治療に影響しないよう配慮した。また、面接によって身体的負担が生じる可能性があるため、面接開始時・面接中は対象者の様子を注意深く観察しながら行うようにし、負担が生じている場合は速やかに面接を中止するよう説明した。さらに、面接による精神的な負担を感じた際にも面接は中断できることをインタビュー開始前に説明すると共に、面接中の対象者の反応を観察し、面接を継続できるかどうかを確認しながら実施した。

5) 分析方法

クリップンドルフの内容分析の手法を用い、質的帰納的に分析する。

4. 研究成果

1) 対象者概要

研究の同意が得られたのは12名で男性9名、女性3名であった。がんの種類は全員肺がんであり、病期はA期が1名、期が12名であった。

2) 高齢がんサバイバーがとらえている自己の存在意義、役割についての内容分析

分析の結果、34コードを抽出し、8サブカテゴリー、4カテゴリーを生成した。以下に、カテゴリー毎に代表的なコードを用いて詳細を述べる。なお、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを“ ”で示す。

(1)【がんサバイバーである自分に可能な範囲で役割を保持する】

このカテゴリーは、2サブカテゴリー、12コードから生成された。<社会貢献のために自分にできる役割を担っている>は、“ボランティアとして町内の行事の手伝いをしている”などのコードから構成された。

<がんに罹っても、自分にできる、自分という存在が担える役割を担い続けたい>は、“周りの人がどんなに支えてくれても、他者が大黒柱である自分と同じことはできない”などのコードが含まれた。

(2)【家庭内で担っている役割を継続して担う】

このカテゴリーは、2サブカテゴリー、11コードから形成された。

<周囲との関係性を円滑にするための役割を担っている>は、“子供が夫という家庭の大黒柱を嫌ったりしないよう、陰ながら夫のフォローをしている”などのコードが含まれた。<家庭の人間関係、環境が良い状態で

いられるような役割を担っている>は、“妻の気晴らしになるように外出の機会を作ることが自分の役割であり、自分にとってよいことである”などのコードから構成された。

(3)【がん罹患によって自己概念が変化する】
このカテゴリーは、2サブカテゴリー、4コードから生成された。<がんに罹っても職場の人に迷惑をかけないようにしながら仕事を続けることは重要である>は、“自身の入院によって職場の人に迷惑をかけないようにできる範囲の仕事入院中も続けている”のようなコードから構成された。<がんに罹って初めて気づいた自分自身の変化>は、“がんに罹らなかつたら、こんなに張り切って物事に取り組みなかつたと思う”が含まれた。

(4)【がん罹患によって見直された自己価値と周囲との関係性】

このカテゴリーは、2サブカテゴリー、7コードから生成された。<がんに罹ったことは自分と周囲との関係性を見直す

きっかけになった>は、“どんな友人とも、これまでの関係性を大切に、仲良く暮らそうと思うようになる”のようなコードが含まれた。<がんに罹ったことは、自分と自分の役割の大切さを改めて感じることに繋がった>は、“がんに罹ってから、自分に与えられた仕事を全うすることが大切だと思うようになる”のコードから構成された。

Stage

看護学を中心とする学問領域の学術論文の中で「高齢がんサバイバーの存在意義」の使われ方をみるために、CINAHL、PubMed、医学中央雑誌Web版 ver.5を用いて文献検索を行った。

検索語は“old age”“cancer”“existence value/importance of existence/meaning of existence”とした。検索の結果、和文献19件、英語文献23件が該当した。これらの文献を用い、概念分析を行っている。その結果とStageの結果をもとに、看護支援モデルの構成要素を検討し、引き続きモデル開発を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 沙織 (KIKUCHI Saori)
群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：10758254

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()